

## 接続詞ケドの手續きの意味<sup>\*/\*\*</sup>

尾谷昌則

### 0. はじめに

接続詞のケドが持つとされる意味・機能には様々あるが、それを包括的に説明するために、本稿では Sperber & Wilson (1986), Blakemore (2000) などが推し進めている関連性理論 (Relevance Theory、以下 RT と略) の枠組みで提唱されている手續きの意味 (procedural meaning) という観点から考察する。ただし、手續きの意味を想定するだけでは解決困難な問題も生じるため、認知言語学 (Cognitive Linguistics、以下 CL と略) で提唱されている主体化の視点を取り入れ、ケドの手續きの意味を論じる。これにより、排他的な関係にあると見られがちな RT と CL が、具体事例を記述・分析する際にはむしろ協調できるという展望を示したい。

### 1. ケドの用法

逆接を表すケドやガの用法については様々なものが指摘されている (国立国語研究所 1951, 森田 1980, 渡部 1995, Itani 1992, 1996, 内田 2001, 許 2004 など) が、永田・大浜 (2001:62) はそれらを以下のように総括している。

- ① 逆接用法 : 雨が降ったけど運動会は行われた。
- ② 対比用法 : 兄は背が高いけど弟は背が低い。
- ③ 前置き用法 : 悪いけどお金貸してくれない?
- ④ 提題用法 : 明日の天気ですが、明日は全国的に晴れるでしょう。
- ⑤ 挿入用法 : この前貸した本を明日、もし無理だったら明後日でもいいんだけど、返してくれる?
- ⑥ 終助詞用法<sup>1)</sup> : すみません、道を伺いたいんですけど。

ケドの中心的な意味が①や②であるという見方はおそらく異論がないであろう。問題は③

～⑥である。これらを①や②との関係で包括的に論じたものは山崎（1998）、永田・大浜（2001）など意外に少ない。ケドを包括的に分析するには、中心的用法である①や②から他の用法をいかに自然に動機付けできるかが鍵となる。

ただし、④の提題用法はケドではなくガの用例となるため、本稿では考察の対象外とする。談話においては、提題用法は基本的に前置き用法（③）と同じ機能を果たすと考えられるが、ガとケドでは接続形式に違いがある。ガは格助詞として名詞に接続することも可能だが、ケドは名詞に接続することは出来ない。

- (1) a. \*明日の天気けど、……。  
 b. 明日の天気 [だ/です] けど、……。

ガには格助詞の用法もあるため、名詞と共起しても全く問題ない。それが節と節を結びつける機能を持つことで接続助詞と呼ばれるのも当然である。しかしケドは、もともと動詞の活用語尾である「けれ」と係り結びの「ども」が一体化したことで成立したため、述語に接続することは出来ても、名詞に接続することは出来ない<sup>2)</sup>。

## 2. ケドの先行研究

### 2. 1. Itani (1992, 1996)

Itani (1992) では、Blakemore (1987) による *but* の手続きの意味に関する分析を援用し、ケドには2つの意味があるとしている<sup>3)</sup>。1つは論理的な結合を表す *and* の意味であり、もう1つは前件から得られる想定と後件の間に矛盾が存在することを表すというものである。そして、これが文末形式として使用されるケドにも適用できるとしている<sup>4)</sup>。それぞれ(2)が文中のケド、(3)が文末のケドの例であり、発話によって喚起される想定は( )内に示してある。

- (2) a. 山田さんは大阪出身だけど、標準語を話す。  
 b. 山田さんは大阪出身だ(から、普通なら大阪弁を喋るはずだ)けど、標準語を話す。  
 (3) a. もう時間ですけど。  
 b. もう時間です(ので話者は聞き手に出かける準備をして欲しいのです)けど、(もし行きたくないのであれば行かなくても構いません)。

これは、終助詞用法にも逆接のニュアンスが保持されているという分析であり、本稿の基本的な考えとも一致するものである。しかし最大の問題点は、これだけでは対比用法や前置き用法が説明できないということである。

2. 2. 永田・大浜 (2001)

永田・大浜 (2001) は、山崎 (1998) の前文脈を考慮した分析を評価し、当該発話が行われた時点における文脈想定へのアクセス可能性を考慮した分析を行っている。ケドは基本的に「否定」を表すものであるとされ、その否定には「棄却」と「抑制」の2種類があるという。(4) が棄却用法の例で、(5) は抑制用法の例である。

(4) これxが書いた本だけど、すごく面白いよ。

(5) もしもし、田中だけど、昨日はどうしたの？

(4) の発話に先立って、「xは面白くない奴だ」ということが話題にとなっていたとする。この場合、アクセス可能性の高い文脈想定が存在するため、(4) の前件発話から「この本も面白くない」という想定が容易に得られる。ここでケド文の後件が発話されると、その想定が否定されることになる。これが棄却用法である。一方、抑制用法とは(5) のような電話による会話の冒頭のように、アクセス可能性の高い文脈想定が存在しない場合である。もし聞き手が、受話器をとるなり(5) の後件発話「昨日はどうしたの？」だけを聞かされていたら、「そんな質問をするのは誰だ?」「間違い電話じゃないのか?」と思う可能性が高い。それでは発話解釈処理が阻害される恐れがあるので、そのような阻害要因が聞き手の想定に顕在化するのを前もって抑制するために、前件発話として「田中ですけど」が使用されるのだという。これら二つの用法は以下の図1のようにまとめられている。

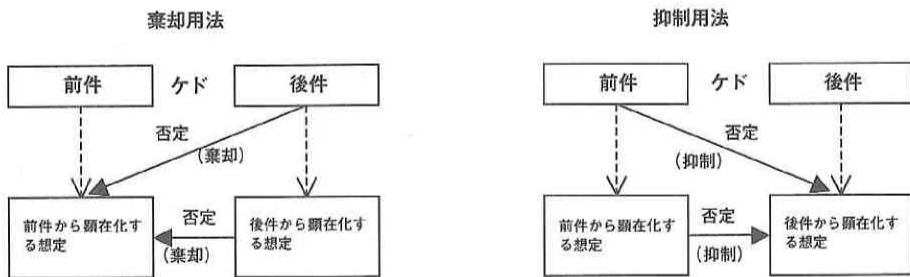


図1

永田・大浜 (2001:69)

明言こそされていないが、棄却用法とは「前件から得られる想定を削除せよ」という手續きの意味と同義であり、Blakemore (2000) による *but* の分析にも通じる。しかし抑制用法は英語の *but* にない用法であり、その趣旨に沿って手續きの意味を考えるならば「後件から得られる想定のうち、解釈を阻害する恐れがあるものを削除せよ。」というものになるだろうが、これには問題がある。例えば(5) からケドを削除しても十分に抑制効果が得られるた

め、抑制がケドの本質になっているとは考えにくい。

(6) もしもし、田中です。昨日どうしたの？

さらに、卒論に関するアドバイスをもらうために研究室にやって来た学生に対して、教授が以下の様な発話を行った場合を考えてみよう。

(7) この本、昨日買ったんだけど、読んでみるといいよ。

学生は何かしら有益な情報をもらえるだろうという文脈想定を持っているはずである。よって前件発話の「この本、昨日買ったんだ」を解釈した際には当然その想定が最もアクセス可能性を増すことになり、そこから推論して「本を貸してもらえる」という想定を得るはずである。永田・大浜 (*ibid.*) の規定では、このような時にケドが後続していると、喚起された想定が棄却されることになるはずだが、実際には棄却されずに想定通りの結果になってしまう。それでは次に抑制用法の解釈へと移行するとしても問題は残る。まず何が抑制されたのかが不明である。ケド節を省略して「この本、読んでみるといいよ。」と発話しても、発話解釈が阻害されるとは考えられない。前件と後件のどちらか一方が他方を否定すると考える限り、この問題は解決しない。そもそも(7)の発話は、何かを否定するためにケドが使用されたわけではないからである。

抑制用法が否定の一種というのも問題である。棄却用法であれば、推論から得た想定が事実とは異なるということで削除され、代わって新しい事実が追加される。しかし抑制用法で抑制される想定は、発話解釈にとって邪魔になる想定ではあっても、誤った想定とは限らない。そもそも聞き手の意識にのぼることがないので、そのようなものを「削除する」というのも変である。棄却用法は「誤った想定 of 削除」によって認知効果を生むことで関連性に貢献するが、抑制用法はむしろ処理労力を軽減させることで関連性に貢献するものであり、両者の果たす機能は異なる<sup>5) 6)</sup>。

### 3. ケドの意味分析

#### 3. 1. ケドの手続き的意味

ケドのような接続詞では、ゲシュタルト心理学でいう図 (Figure) と地 (Ground) の関係が重要な役割を果たしていると考えられる。図とは最も際立って認知された対象であり、地とは図を位置づけるための背景・土台として機能するものを指す。この概念を言語研究に初めて援用したのは Talmy (1978) であり、彼は次のような文で容認度に差が生じることを、

図と地の観点から鮮やかに説明している。

(8) a. The bike(F) is near the house(G).

b. ? The house(F) is near the bike(G).

Talmy (1978: 627)

例文 (5a) のように、相対的に大きくて安定感のある家を地として用いて自転車 (図) の位置を特定するのであれば全く問題がない。しかしその関係を逆転させた (5b) の文は多少不自然に感じられる。これは、家のように大きく安定したものを同定するために、自転車のような相対的に小さく、同じ場所に恒常的に存在するわけではないものを地として用いたことにより、一種の認知的矛盾が生じるためである。

地によって図を位置づけるこのような認知方略は、接続詞を用いた複文にもあるとされている。例えば以下のような複文では、従属節事態が地となり、図である主節事態を解釈するための土台となる背景知識なり前提を提供しているとされる。

(9) a. When I was walking down the street, I happened to meet her.

b. I took a taxi, because I was tired.

このような事実から、ケドを含めた接続詞全般に共通する手續きの意味として「主節事態を図として解釈する際に、従属節事態を地として利用せよ」というものが抽出できる。これを < F-G 関係 > と呼ぼう。これはケドの逆接用法 (10) に限らず、前置き用法の (11) や (12) にも見られる。

(10) お腹が痛いけど、頑張って走ります。

(11) 悪いけど、これ貸してくれない？

(12) 例の件だけど、誰が行くことになった？

ただし、< F-G 関係 > は接続詞全般に共通するものであり、ケドだけが持つ意味ではない。図と地が具体的にどのような関係で結ばれるのかは、各々の接続詞が有する個別の意味による。ノテならば「後件を、前件から得られる帰結として解釈せよ」であり、ナラであれば「前件は、後件が成立するための条件と解釈せよ」ということになる。そしてケドの場合は、「前件と後件との間に何らかの対立があるものと解釈せよ」ということになるであろう。これを < 対立関係 > と呼ぶ。ケドの手續きの意味は一枚岩ではなく、以下のような2つの意味から成り立っていると考えられる。

(13) ケドの手續きの意味：

a. 従属節事態（前件）を地として利用することで、主節事態（後件）を図として解釈せよ。

[F-G 関係]

b. その際に、話し手が両事態の間に何かしらかの対立関係を見出していると解釈せよ。[対立関係]

このように、ケドは接続詞カテゴリーの成員として他の接続詞と共有している意味と、ケドだけが持つ固有の意味の2種類を持つと考えられる。そしてこの2つの意味を両方とも色濃く反映する用法こそ、最も典型的な用法の逆接用法である。

しかし(13)だけでは、それ以外の用法を説明できない。RT的な手續きの意味のみによる分析では、ケドの全ての用法を包括的に捉えることが困難であることは2節でも見たとおりである。それ以外の用法をも動機付けるためには、(13)で提案した手續きの意味がその他の用法へ、特に逆接のニュアンスがほとんど感じられない前置き用法へと自然に拡張し得ることを説明できるものでなければならない。そこで本稿では、CLで提唱されている主体化(Subjectification)という概念を援用し、逆接以外のケドの用法は、(13)が主体化したものとして動機付けられると主張する。

### 3. 2. ケドの主体化

意味には客体的な側面と主体的な側面がある。CLでは、語の意味が客観的に存在する概念のみで規定できるものでは決してなく、認知主体(conceptualizer)である我々の捉え方(construal)も意味に反映されていると考える<sup>7)</sup>。それが最も顕著に見られるのが主体化である。Langacker(1999)は主体化について以下のように述べている。

- (14) "A revised characterization of subjectification can now be offered: An objective relationship fades away, leaving behind a subjective relationship that was originally immanent in it (i.e. inherent in its conceptualization)." (Langacker 1999: 75、下線は尾谷)

意味に含まれる認知主体の「捉え方」とは主体的な側面に属するものであるが、それは主体的ゆえ客観的に認識することが困難な場合が多い。主体化とは、客体的な意味が背景化することで普段は意識されることがなかった主体的な意味が相対的に際立ってくるという現象である。その例としては動詞 *rise* の例がよく知られている。

- (15) a. The balloon rose swiftly.  
 b. The hill rose gently from the bank of the river.

(15a) の *rise* は、風船の上昇移動のみを表しているように思えるが、それでは (15b) の *rise* は説明できない。両用法に共通しているのは認知対象の物理的な上昇移動ではなく、その移動を認識するために自らの視線を上昇させながら認識活動を行っている認知主体の認知プロセスなのである。この違いを図示すると以下のようになる。

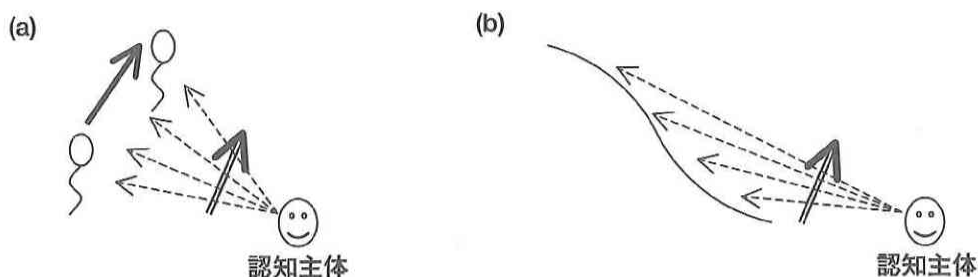


図 2

中村 (1999、一部改)

太実線の矢印は認知対象が上昇移動するプロセス (客体的意味に相当)、破線矢印は認知主体が対象を認識する活動を表すメンタルパス、太二重線の矢印はメンタルパスを上昇させながら対象を知覚する認知プロセス (主体的意味に相当) をそれぞれ表している。(15a) の *rise* にはその両者が含まれているのに対して、(15b) は客体的な意味が背景化し、代わって元々あった主体的な意味が顕在化した用法ということになる。

Langacker (1999) は、主体的/客体的な意味の区別は相対的なものであるとしているが、先ほど見た *rise* の例のように、認知される対象はより客体的な意味に属し、認知主体が行う把握のプロセスに関するものはより主体的な意味に属すると考えられる。ゆえにケドの場合、客体的意味に相当するのは認知対象となる前件と後件の間に成立する関係、つまり<対立関係>であり、主体的意味に相当するものは認知主体が地 (前件) を経て図 (後件) へと認識を到達させる認知プロセス、つまり<F-G 関係>ということになる。これを図示すると以下のようなになる。Event 1、2 と書かれた正方形はそれぞれケドによって結ばれた前件事態と後件事態を表し、双方向の矢印はそれらの事態間に成立する<対立関係>を表す。破線矢印は認知主体 (C) が各事態を把握するメンタルパスを表し、二重線の矢印はそのメンタルパスが地 (G) である前件から図 (F) である後件へと移行してゆく認知プロセスを表す。

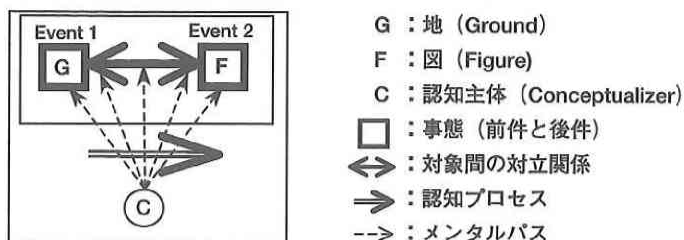


図3

接続詞ケドの様々な用法は、中心的な用法である逆接用法がこの主体化によって多様化したものとして動機付けることができるというのが本稿の提案である。前節(13)で提案した<対立関係>と<F-G関係>という2つの手続きの意味のうち、<対立関係>の意味(図3の双方向矢印に相当)が背景化し、その背後に隠れていた<F-G関係>の意味(図3の二重線矢印に相当)が相対的に際立ったものが前置き用法などの他の用法というわけである。それを表すのが以下の図である。

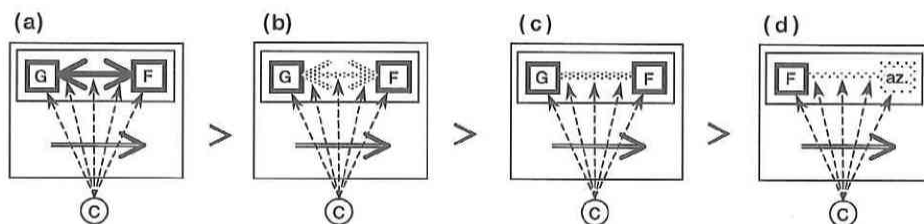


図4

尾谷(2003、一部改)

図4(a)はケドの最も典型用法である逆接用法を表しており、基本的に図3と同じである。しかし図4(b)、(c)、(d)へ行くに従って双方向の矢印が薄くなるが、これは<対立関係>が背景化してゆくプロセスを表している。それにより、背後に潜んでいた<F-G関係>の認知プロセスが相対的に際立ってくるのである。つまり、互いに対立関係にないような事態でも、前件が後件を解釈する際の地として機能するのであれば、その関係をケドで表すことができるようになるというわけである。これによって③の前置き用法が自然に動機付けられる。この用法は、後件(図)の解釈を何らかの形で促進するための地として前件を提示している用法だからである。⑤の挿入用法も運用上の理由でたまたま出現位置が文中にくるだけで、実質的には前置き用法と同じと考えてよいだろう。また、逆接用法のようにハッキリとした排他的な関係ではないが何かしらの弱い対立が感じられる対比用法は、逆接用法と前置き用法の中間段階にある図4(b)に相当すると考えられる。



最後に⑥の終助詞用法であるが、これは最も背景化が進んだ段階の図4 (d) に相当すると考えられる。例えば以下の表現である。

(16) もう帰りたいんですけど。

話し手は、自分が最も伝達したい内容である「帰りたい」という意思表示を前件でプロファイルしている。そのため、それだけで聞き手の認知環境に十分な変容をもたらすことができる（つまり十分な関連性を達成できる）と思ってしまい、後件発話（例えば「構いませんか?」など）までも発話する動機が薄れてしまう。これが後件発話の省略される理由である。これは、聞き手の処理労力を削減するというよりも話し手自身の発話労力を削減することを優先した結果であると考えられる<sup>8)</sup>。

しかし聞き手の側からすれば、「帰りたい」という相手の願望だけを解釈するだけでは済まされない。なぜなら (16) のケドにも「前件を地として利用することで、図である後件を解釈せよ」という〈F-G 関係〉の手續きの意味が背景化されずに残っているため、「もう帰りたいんです」という発話を地として利用することで、発話されなかった後件を図として解釈せよと指示されているからである。そのため、(16) の発話から得られる「話し手は帰りがっている」という想定と、コンテキストから活性化させた「自分は話し手に帰る許可を与えることができる立場にある」という想定を元にして推論し、「帰る許可を与えるかどうか自分が決めなければならない」という解釈に至るのである<sup>9)</sup>。

これまでの先行研究は、どの用法にも何かしらの反意関係を設定しようと四苦八苦しているが、この主体化分析では、その必要がない。例文(7)で問題になった矛盾も何ら問題なく説明することができる上、聞き手が持ち得ない想定を否定するよう指示するという奇妙な矛盾も起こらない。

### 3. 3. 背景化の原因 ～二項対立から多項対立へ～

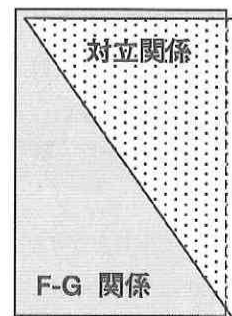
ところで、なぜ〈対立関係〉の意味が背景化するのだろうか。これは決して恣意的な原因によるものではない。本稿では、二項対立から多項対立へという拡張により反意関係が弱まったものとする。例えば以下の例である。

- |                                 |        |
|---------------------------------|--------|
| (17) これは男だけど、あれは [女だ/男じゃない]。    | 二項対立   |
| (18) これは高いけど、あれは [低い/高くない]。     | 疑似二項対立 |
| (19) これは赤だけど、あれは [青だ/緑だ/赤じゃない]。 | 多項対立   |
| (20) これは石だけど、あれは [紙だ/石じゃない]。    | 疑似多項対立 |

ケドが何かしらの<対立関係>を表していることは、直観的にも疑いようのない事実であり、その典型は(17)のような相補分布を成す語彙による二項対立である。このとき、後件を前件の否定形にしても命題の意味に変化はない。実はこの否定表現が重要な意味を持つ。(18)のように「高い／低い」も直観的には二項対立と感ぜられるかもしれないが、これは厳密には相補分布をなす語彙ではなく、どちらにも属さない中間段階が存在するため、疑似的な二項対立である。この「高い／低い」を二項対立として捉えるのは、「高くないのなら、低いだろう」という誘導推論の結果であるが、高くも低くもない場合もあるのだから、実質的には三項対立である。「対立」といえば必ず二項が対立しているかのような錯覚を引き起こすが、実際には多項対立を成している場合も多いのである。(19)では、実際に対比されているのは「赤」と「青」もしくは「赤」と「緑」であるが、色の種類は他にも沢山あり、それらの中から二項を取り出して対比しているだけである。にもかかわらず対立の意味が読み取れるのは、「これは赤だけど、あれは赤じゃない」というように、両立不可能な関係が成り立っているからである。このような関係があるからこそ、多項対立の場合でも同じケドが使用できるのである。ただし(19)の多項対立は、色彩語彙というある程度安定したカテゴリー内での限られた数の成員同士による対立である。これが(20)になると、「石」と「紙」が含まれる安定したカテゴリーを想起するのは困難で、無限に近いもの同士が対立しているように捉えられている。このような疑似多項対立にまでなると、二項対立の場合よりも明らかに反意関係が薄らいでおり、単に両者を比較したり(対比用法に通じる)、後者のために前者を引き合いに出したり(前置き用法に通じる)しているとしか解釈できない。このように、<対立関係>が背景化するキッカケは多項対立や疑似多項対立にあると考えられる。それにより、それまで背後に隠れていた<F-G 関係>が相対的に強く意識されるようになるにつれて、対比や前置きの用法として意識されるようになってゆく。そして最終的には、(21d,f)のように反意関係がほとんど感じられない用法にまで広がるというわけである。

(21) 達也は南ちゃんのこと別に好きじゃないって言ってたけど、

- a. 本当は好きなんだ。
- b. 本当の気持ちはどうか分からない。
- c. 彼って照れ屋さんだからね〜。
- d. 克也はどう思っているんだろう？
- e. みんなどう思う？
- f. 僕にも同じような経験があるなあ。



### 3. 4. < F-G 関係 > と参照点構造

言語の逃れられない特性の一つに線状性がある。二項対立であれ多項対立であれ、2つのものを取り上げられて言語によってコード化されるとき、両者の間には否応なしに順序が生じることになる。先に発話された内容は、当然先に解釈されてしまうため、後から発話される内容を解釈する時には既に聞き手の想定の一部となってしまうと考えられる。つまり、後件の解釈を行う際には、常に前件は何らかの前提として利用されるということは避けられない。これが基本的には< F-G 関係 >ということになる。前件が地として、後件が図として解釈されるのはこのためである。

この図と地の区分と非常に近い概念として、参照点構造 (Reference-point Construction, Langacker 1993, 1999) が考えられる。これは、目的の対象 (ターゲット) に直接アクセスするのが困難である場合に、何か別の目印 (参照点) を経由することで間接的に対象へアクセスするという人間の認知方略の一種である。地を利用して図を解釈するというプロセスは、参照点を利用してターゲットを解釈するというプロセスと基本的には同じ認知プロセスであると考えられる。英語のように従属節を後置させることができない日本語は、この<参照点→ターゲット>という認知プロセスを語順に連動して反映させることが多く、ケドをはじめとする接続詞全般に共通して反映されている認知プロセスでもある。

ただし、尾谷 (2005) でも述べているように、参照点が使用されるのは、なにもターゲットに直接アクセス困難な場合であるとは限らない。

- (22) コアラで有名なオーストラリアで、オリンピックが開催された。
- (23) 黒いカラスは、夜だと見つけづらい。
- (24) ?# 鳥類のカラスは、夜だと見つけづらい。

(22) では、「オーストラリア」というターゲットに対して、「コアラ」という参照点が用いられているが、そうせずとも一般的な教養を持ち合わせた聞き手であれば、「オーストラリア」を正しく解釈できないことなどないはずである。ましてや発話者が知らないはずもない。これは、コアラという有名な動物と結びつけることによって、聞き手の想定の中から「オーストラリア」にまつわる想定を活性化しやすくしているのである。似たようなことは (23) においても見て取れる。一般的に「カラスは黒いものだ」という想定があるので、「黒い」という修飾語は余剰のはずである。しかし「黒」という概念は、「夜だと見つけづらい」という後件発話を聞き手が解釈する際に、見つけづらい理由を示すものとして貢献している。このような参照点の使用は、後続発話の解釈に要する聞き手のコストを軽減することで関連性に貢献しようとするものであり、聞き手のために話者が行う配慮なのである<sup>10) 11)</sup>。その証拠として、聞き手の解釈コスト軽減に何ら寄与しない (24) の発話は不自然になる。ケドの前置き

用法は、聞き手の解釈コストを軽減させることで関連性に貢献しようとする話者の認知的営みから生まれた用法であり、それらの背後に潜む< F-G 関係>もしくは< 参照点→ターゲットの関係>に動機付けられた多義構造として位置づけることができる。

#### 4. おわりに

本論では、単に「誤った想定を削除せよ」や「邪魔な想定を抑制せよ」というような手続きの意味だけではケドの様々な用法を包括的に説明できないとして、CLで提唱されている主体化と組み合わせる分析案を提案した。手続きの意味も概念的意味と同様に語彙意味であるからには、語彙の意味変化に関するCLの研究が援用できない道理はない。意味変化についてはRTの分野でも概念的意味から手続き的意味へ文法化するという研究(Nicole 1998, Higashimori 2003)が提出されてはいるが、これは要するに「内容語から機能語へ変化する」と述べているに過ぎない。語の意味の多義性や、意味変化の原因とプロセスを細密に記述・予測するという点においては、RTよりもCLの方に一日の長がある。何かと排他的なニュアンスで比較されるRTとCLではあるが、それぞれに真実を捉えている点が多々あるはずであり、それらを協調させることでより幅広い分析・説明が可能になると思われる。本稿がその先駆けとなれば幸いである。

\* 本稿は、日本言語学会第129回大会(2004年11月於富山大学)にて口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。会場では実に多くのコメントを頂いた。ここに記して謝意を表したい。

\*\* 日本語学では、ケドを接続詞ではなく接続助詞と呼ぶ場合もあるが、本稿では接続詞と呼ぶことにする。その理由は1節で述べるとおりである。

#### 注

- 1) ここでは先行研究にならって終助詞用法と呼ぶが、ケドが完全に終助詞化しているとは考えられないため、誤解を避けるためにも文末用法とした方がよいと思われる。
- 2) ケドは活用しない付属語ということでガと同じ接続助詞と分類されるのが一般的であるが、ガとは異なる一面もあるため、本稿では接続詞と呼ぶことにする。
- 3) 確かに *but* は逆接を表す接続詞ではあるが、ケドのように2文を連結する機能を有するという点ではむしろ *though* や *although* の方が近いと思われる。
- 4) ケドが表す機能を2つに分けていること自体は、本発表の分析と同じであるが、その中身は大きく異なる。
- 5) 聞き手が実際に行う推論を具体的に指示している棄却用法が「積極的な」手続きの意味であるとするならば、この抑制用法というのは、聞き手が実際に行う推論についての具体的な指示ではなく、ただ余分な推論をさせないというだけの「消極的な」手続き的意味ということになる。その場合、おそらく抑制用法の手続き的意味は「前件から得られる想定認知ドメインの中で、後件発話を解釈せよ」というものになると思われるが、これは本論で主張する< F-G 関係の解釈>と同義である。また、提

題用法や前置き用法などは、「なぜ自分が後件のような発話を行うのか」という事に対する話者の態度表明とも解釈できるので、Traugott (1982, 1995) のいう主観化 (Subjectification) の結果であるとも言える。このような方向性は Langacker (1999) の主体化と矛盾するものではない。むしろ、両現象が同時に起こる可能性が高いと考えられる。

- 6) とはいえ、抑制という概念は非常に重要な位置を占めるものであることは認めざるを得ないと思われる。ただし、抑制は独立した一つの用法というよりは、むしろ前置き用法の下位類である。話者が前置きを発話するのは、自分がこれから述べる事柄について聞き手に予備知識を与えて準備させるというものであり、その準備の一種として抑制があると考えられる。
- 7) 例えば「明けの明星」と「宵の明星」のように、客観的には同じ指示物であるにもかかわらず別々の呼び方が存在するのも「捉え方」の違いに起因している。
- 8) 話し手は、自分の発話に要するコストと、聞き手の発話解釈にかかるコストのバランスを無意識のうちに考えて発話内容を決定していると考えられる。ただし、聞き手の解釈コストを無視して過剰な情報提供 (発話) が行われる場合もあれば、聞き手の解釈に必要な情報が十分に提供されない場合もあるため、常に一定のバランスが維持されている保証はない。
- 9) 自分の要求なり主張なりが前件で既に発話されてしまうので、発話者の意図は達成される。従って後件は発話されないのが普通であるが、相手のリアクション (特に許可) を必要とする場合には、そこまで発話しなければならない。(c.f.岡野 1991)
- 10) 実際に聞き手の解釈コストがどれだけ削減できたかは問題ではない。話者にとっては発話コストが多少かかることになるが、それでも聞き手の解釈コストを軽減する方が関連性に貢献できると判断 (予想) したから参照点を発話しただけであり、その判断が正しいかどうかは問題にはならない。
- 11) これは、CL にとっても示唆に富む分析である。CL では、話者の事態認知がそのまま言語に反映されると仮定しているが、その中に聞き手への配慮が含まれているかどうかについては、筆者の知る限り議論されていない。筆者自身の考えでは、聞き手とは事態の参与者の一人であることから、当然それも事態認知の中に入れて良いと考える。ちなみに、Langacker はスキーマの図を提示する際に、好んで概念形成者 (conceptualizer) という用語を用いて両者を意図的に区別していない。これは基本的に話者も聞き手も同じような認知プロセスをたどるということを暗黙の前提にしているからだと考えられるが、本論のような議論を突き詰めてゆけば、両者の区分を厳密に行おうとしない CL の立場は甚だ問題であると思われる。詳しくは尾谷 (2005) を参照。

#### 参照文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantics Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 2000. "Indicator and Procedures: *Nevertheless and But*." *Journal of Linguistics* 36-3, 463-486.
- Higashimori, I. 2003. "Grammaticalization of Discourse Connectives: From Conceptual to Procedural Meaning." *The Ryukoku Ronshu* 461, 21-45.
- Itani, R. 1992. "Japanese Conjunction KEDO ('BUT') in Utterance-Final Use: A Relevance-Based Analysis." *English Linguistics* 9, 265-283.
- Itani, R. 1996. *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 国立国語研究所. 1951. 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』東京：秀英出版。
- 許 夏玲. 2004. 「語用論の観点から見た文末表現の使用—『ケド』を例にして—」『東京学芸大学紀要 2 部門』55, 59-65.

- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics*. 4-1, 1-38.
- Langacker, R. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistic Research 14.) Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語2』東京：角川書店
- 永田良太. 2001. 「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』3-2, 17-26.
- 永田良太・大浜るい子. 2001. 「接続助詞ケドの用法間の関係について—発話場面に着目して」『日本語教育』110, 62-71.
- 中村芳久. 1999. 「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」第2回認知言語学フォーラム口頭発表資料.
- Nicole, S. 1998 "A Relevance Theory Perspective on Grammaticalization." *Cognitive Linguistics* 9, 1-35.
- 尾谷昌則. 2003. 「主体化に関する一考察：接続詞『けど』の場合」『日本認知言語学会論文集』第3巻, 85-95
- 尾谷昌則. 2004. 「発話者志向の語用論：『けど』の手続き的意味を通じて」日本言語学会第129回大会口頭発表資料.
- 尾谷昌則. 2005. 「自然言語に反映される認知能力のメカニズム ～参照点能力を中心に～」京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士論文
- 岡野喜美子. 1991. 「許可を求める表現 ——タイムデスケドをめぐる——」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』3, 1-22.
- Sperber, D. and D. Wilson 1995. *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell. (内田聖二他訳『関連性理論—伝達と認知—第2版』東京：研究社出版)
- Talmy, L. 1978. "Figure and Ground in Complex Sentences." In J. H. Greenberg ed. *Universals of Human Language 4: Syntax*. 625-649. Stanford: Stanford University Press.
- Traugott, E. C. 1982. "From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization." In W. P. Lehman and Y. Malkiel eds. *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. C. 1995. "Subjectification in Grammaticalization." In D. Stein and S. Wright eds. *Subjectivity and Subjectivization*. 31-54, Cambridge: Cambridge University Press.
- 内田安伊子. 2001. 「『～けど』による補足表現について」『表現研究』73, 9-15.
- 渡部 学. 1995. 「ケド類とノニ類 —逆接の接続詞—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』557-564. 東京：くろしお出版.
- 山崎深雪. 1998. 「接続助詞ガの談話機能について」『広島大学教育学部紀要 第二部』47, 229-23